

校

報



五
月
號

昭
和
五
年

6

ナゴヤ
電氣學校

學校からの便り

三月二十一日 晝間部本科生の卒業式を舉行した。本年の卒業生は百六名である。式の後同窓會の會合が催された。新入會員歡迎の意を兼ねて。

四月八日 晝間部第一學年生の入學式。入學者百四十名。我校の光輝ある歴史と堅實なる校風を慕つて來れる前途多望の少年たちだ、諸君よ、君たちは我校の歴史の新しい頁を記す者だ、自重してくれ。

四月八日 午後教員室の同人十二名は郊外の春色を樂しまんとて覺王山から八事方面へ打ちつれて散策に出かけた。天白溪の茶店に折からの雨を避けながら清談快談漫談數刻雨もはれたので山つゝじを賞しつゝ歸途につく。實に和氣あい／＼たる愉快な行遊であつた。これなる哉！と自分は思つた。このなごやかな氣風あつて、はじめて教育が可能なのだ。往々にして教育界に見らるゝ如き教員間の暗闘黨派争ひなどの中にあつてどうしてよき教育があり得るであらうか、教員室の氣分が生徒に反映しないであらうわけはないのだ。

敢て我が校の一つの美点をこゝに誇る所以である。

四月三十日 我が校の設立者にして前々校長たりし故後藤先生の法要及び逝ける教職員卒業生生徒諸氏の追弔法會を覺王山にて行ふ、遺族の方々及び全校職員生徒參列す。六月初旬 各學年別に修學旅行をなす豫定である。

唐詩妄評 (二) 杏西散人

歸 雁 錢 起

瀟湘底事等閑回 水擘沙明兩岸苔

二十五絃彈夜月 不勝清怨卻飛來

此詩も私の少時より愛誦した一つであります然るに私の解釋と先人の其れとは聊か趣を異にして居りますから先づ先人の解を紹介しませう。

瀟湘より底事を等閑に回る、水は碧りに沙明かなり兩岸の苔、二十五絃夜月に彈せば、清怨に勝へずして卻て飛び來らん。

意 錢起が雁に向つて問ふには其方は何故に瀟湘の絶景を打棄て等閑(呆然と理由なく)に此の僻地へ回り來るぞ、夫れ瀟湘の絶景たる水は碧りにして底まで透き徹り沙は夜分にも明かに見え且つ瀟湘の川の兩岸には悉く青々として苔が生へて鮮かではないか(一説に苔の字は單に景物のみの謂にあらず雁の食餌なり)、其れを歸つて來るのは瀟湘には湘君(堯の二娘、舜の二妃)が祭つてあつて月明の夜に瑟(五十絃又は二十五絃)を鼓するから、其聲悽愴として怨むるものあり仍て無情の鳥とはいへども清怨に堪へず瀟湘を棄てて却つて飛んで來るのであるか此解に従ひますと錢起は北地に在つて此詩を作つたやうに聞えます、が、北地に在つて作るくらゐなら必しも瀟湘より回ることを推定しなくても他の地から回つて來ることを推定しても可さうに思はれます、現に支那には回雁峯といふ一山脈があつて雁は其れより南へは渡らない乃ち其邊

まじ行つて回つて來ると言ひ傳へられて居りますから此山などを題材に選んだ方が寧ろ有利なやうに思はれます、勿論瀟湘は音に聞えた勝地ではありませんが此二水の地必しも雁と交渉を持つて居る譯ではありませぬ、扱て顧みて此詩を通讀する時起承の二句は實に明白に瀟湘の風物を吾人の眼前に展開して居りますし且つ轉結の二句は言はずして湘君鼓瑟の傳説を推想せしむべく按排せられて居りましたて徹頭徹尾瀟湘を中心として雁の北に歸るのを惜んだ詩としか受取れませぬ。又事實作者が胡北に在つて作つたものとするならば何故に雁が其故郷へ歸り來つた事を歡迎してもやらないで却つて瀟湘の地を離れて來たことを訝り問ふやうな詩を作つたのでせう、要するに先人の解には矛盾が有ります、そして其矛盾は漢語を解する術を能く知らないから起つて居ります。

先人は飛來の字義と回の字義とを誤解してゐるから斯る間違ひを生じたのです。

飛來は成る程普通には飛んで來るといふ意味に用ひられませんが同時に唯飛ぶ(來は此の場合に助辭となる)又飛び去ると云ふ意に用ひらるゝ事、往古より支那の通則であります英語のカム(來る)が日本では行くと言ふべき處に能く使はるゝが如く、去來の二字は自由なる用語自由なる助辭である事に氣が着かないと時々ヒョソな間違ひが起ります。陶潜の「歸去來田園將蕪不歸」を先人は「歸へんなんいざ田園將さに蕪れんとする胡ぞ歸らざる」と讀ませ、歸去來の三字に就ては歸去を歸へんなん、來をいざと振り假名を附けて居りますが來は此場合純然たる助辭と見れば澤山

でいざなどゝ勿體味を附けなくても宜しいのです、乃ち歸去は「歸へらん」來は「かな」の意を含める爲めに用ひらる助辭と見るのが最も適切なる正解であります、現代の支那語ならば「歸去々々田園將蕪……」と云ふべき處であります。歸去を二度繰返して言ふ時は音が追つてせ、コマしくなりもす故に歸去の下へ來を附けたので此の爲めに語がノンビリと聞えます流石に陶淵明は文章家です。

又歸去を歸つて來る、歸來を歸つて行くと云ふ義に用ふるのは支那人の常套でありまして古くから行はれ平仄の都合やら其場合の語調やらで自由勝手に使つて居ります。

乃ち此詩の飛來は飛去又は單に飛ぶの意でありまして「灰」の韻が用ゐてあるから來の字を使つたのです、そして此の來の字の爲めの故に一派の脈々たる餘韻を味はされるのです。回の字義に就ては後に述べませう。

前述の理由に據つて私の解は先人と反對になりますから隨て轉結の讀み方が變ります。

二十五絃夜月に彈じ、清怨に勝へずして却つて飛來(ヒライ)すらん

意 此様な勝地を何故に見棄て、回り行くぞ惟ふに月明の夜に彈する事ありと傳ふる湘君の琴の音の清怨さに裏淋しく居た、まらず飛んで行くのであるか(名殘が惜しいぞ)

卻の字の意義は、普通ならば女神の琴の音に聞き惚れて無理にも足を停むべきであるが、湘君は此湘水に溺れ死んだのであるから其の琴の音も自ら清怨なるべく、隨つて停まるべきを停まらずして却つて……と云ふ意に汲み取られ

一段意味の深長なるを覺ねます。
清怨の二字は宮怨、閨怨などの怨にはあらずと云ふ意味から用ひられた熟語で先人の解するが如く凄愴といふ程に執らなくても可いでせう、幽愁、旅愁などの字より些しく響きを強くしたまでの文字です。

承句の兩岸苔の苔の字を雁の食餌なりと解する事は一面此の字を活かして見る解し方で洵に結構だと思ひますが『兩岸には青々として苔が生へて鮮かで云々』と解し苔の字を單なる蘚苔にしてしまふのは餘りに此詩を拙く取り扱ふものではありますまいか、第一瀟湘二水の河幅から言つても兩岸にある蘚苔などは双眼鏡でも用ゐなければ見えない筈です、此字は後代(唐よりも)の著書ではあるが五雜俎などに見ゆる如く『樹木は山の苔』と見て兩岸には草木蔚葱たりを苔の一韵字で表したものと解したのであります、左もないと水碧沙明の好熟字を打毀してしまふ恐れがあります。沙明の字も何ういふ譯で『夜分でも明かに見える』と解したのか知りませぬが、其んなにコヂ附けなくとも單に沙白しの意で白は仄字だから明にしたと思へば其れで充分此詩の美點を味ふ事が出来ます。

起句の回字も先人は單に歸るの義に採つてしまひますから飛來の字と併せて誤解を起す基に成つてをります、成る程回春、回復など形容詞に用ゐられたる回字には歸るの意も籠つて居りますかなれども單用動詞として回を歸に用ふることは限られたる場合の外は行はぬ事です、回は言ふまでもなく踵を廻らすです、歸も還も回も返も日本語ではカヘルに讀むから下手をすると誤用誤解をします、漢語を

訓讀するだけで一々字義を詳にせぬと先人でも得て間違ひをやり、今一度繰返して解きますが、起句は『瀟湘より何の故に等閑に踵を廻らして立去るぞ』であります、『瀟湘より何の故に此の僻地へ歸つて來たか』では有りませぬ扱て此詩の品評ですが轉結の二句は那時誦じて見ても軟かな軽い感興を催します、其れは二十五絃とノンビリ間延びのした語(修辭上の緩調詞)を使つて其れを清怨と短く受けて結んで居る、其處に言ひ知らぬ悠調を現はしてゐるからであります、緩調詞が悠調を與へる例は『彼の南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中』が最も著名な一例でありまして、四百八十寺と五字に亘る間延びの語を多少の二字で受けて引締めて居る其の一擒一縱の味ひは謂ゆる詩中に詩を作る者でありまして言外の韵、韵外の情眞に脉々嬾々たるものがあります。

今此詩の二十五絃を取去つて神女長絃、湘女幽琴などの代用語を挿入して見る時忽ち詩調の逼促する事を感ずるでありませう、此に於てか始めて緩調詞が如何にノンビリと詩味を加ふるかを覺る事が出来ます、此詩の長所は即ち此に存するのです。

餘談ではありますが和歌には殊更ら此の間延びを貴びまして『長々し夜』といふだけでも業に既に間延びのした語でありますのに『足曳きの山鳥の尾のしだりを』と三句に亘る枕言葉と掛り言葉を聯用したる天晴の技巧は單り其の當時に在つて一世を驚倒したるのみならず千載の今日に及んでも猶且つ人の朗吟して惜かざる所でありまして此の所以は畢竟和歌には悠調其のものが詩に於ける韵の代用をす

るからであります、今の新しい若い歌人の多くは古來和歌に用ゐられたる『なん、らん、かな、けり』などの切れ字や枕言葉若くは掛り言葉などを無用の長物視して徒らに逼促せる散文の如き語を並べて新らしがつてゐるやうであります、斯んな風調は抑も那時まで保たれるでせう、私は長くても二三十年の後には皆其の非を悟るであらうと思ひます、韵(ライム)なるものを有せざる和歌より切れ字、枕言葉、掛り言葉を奪つたならば其れは何になります、畢竟限られたる字數の中に鑄込まるゝ散文たるに過ぎないではありませぬか、結局今の新人の和歌は其の内行詰ります、行詰つたる後の針路はと問ふ人あらば私は答へます、再び萬葉古今に戻るか左もなくば畫家にして俳人たりし蕪村が曩に試みたる語尾を同じ假名で揃へる(漢詩の韵に模する)法及び折疊式(リフレイン)を併用するより外は有りませぬまいと、併し和歌の事は追て他日を期し稿を更めて論ずる機が有りませうから此で擱筆します。

詩評に戻りまして、二十五絃の下に夜月の字が置いてあります、如何にも月明の夜を偲ばせる言ひ廻しであります、之を月夜と置替て見た處、平仄に異動を生じないのでありますから其れでも可さうなものです、其れでは月明の感を薄らげます、詩人推敲の用意正に斯ういふ處に在るのです。

之を總評しますと、餘りに此詩に凭れるやうですが

月華天心に印して歸鴻を照し、琴音江頭に落ちて離愁を湛ふ、月を仰げば心氣自ら軒豁、琴に接すれば情緒轉た纏綿。歸鴻を目送し離愁を緬想す、詩中の清怨は即ち是

れ讀者の清怨とでも謂つべきでせう。

希望社とエスベラント

小和田

僕は希望社の活動もその中心人物である後藤静香氏の思想もよくは知らぬかつて匿名の生徒から投書で、希望社の精神運動についての紹介を校報紙上でして欲しいと云つて来たことがあつたが、充分知りませぬ事柄に關して紹介をするのは無責任であるし、それにその生徒の匿名であることにも不満があつて没書にしてしまつた。

正しいと信ずること、よしと思ふことには堂々男らしく姓名を名乗つて勇敢に進んで欲しいのである。

僕としてはむしろ石丸梧平氏の雑誌「人生創造」を紹介するのが無難である氏の思想については少しは知つてゐるし人生に對するその眞剣な態度を僕は尊敬すゝし氏の全人的な教養に信頼ができるのであるから、後藤氏について知らぬことは今も變りはない、たゞ氏が今年の二月頃からエスベラントによつて氏の精神運動を全世界に向つて進出せしめんとされてゐられる事柄についてたけいさゝか僕に感ずるところがあつてこゝに一文を草することにしたのである。

が、僕の紹介は單にエスベラントに關する点に限られる。それ以上のごことはやはり責任あることは云へない。

何を感じたか、僕は?

氏の抱負の大きさである。又エスベラントに對し、に對しての見識の高さである。紙面が盡きるから氏の文章を引用してペンをおく、これは氏の雑誌「希望の日本」二月號の記事をエス語雑誌「ラ・レヴュー・オ・オリエンタ」四月號より二重に引用する、傍線は筆者がつけたもの。

「時が来た、もう人類に呼びかけねばならぬ時が来た、全日本を風靡してゐる此の精神運動が國境を越えることに何の不思議もない(中略)英語は世界的に最も多く使はれてゐるとは云へ日本が英國の屬國であるかの如く世界の處に和英相並べて記す屈辱をしない。又英語が英國以外の國民に對して快く受け入れられるものでない。我々は世界人として國際語エスベラントを學ぶ義務を感ずる。少くとも世界人としての意識に立つべき此の必要を感ずる。併し英語に對してそんな義務も必要もない。希望社の著書は續々エス語譯する、従つてそれが英佛獨等に譯される。日本の若人に漲る清き情操と新しき力ある國民運動の實際とがそのまゝに世人に知られることになる、悦びであり又大きい責任を感ずる。かくして日本エス語運動は嵐の様な勢で日本全上にひろまつて行く」

斷 片 錄

五 風 山 人

○天 行 は 健。

大自然は恒に易らず、健な姿をして一定の軌道を運行してゐる。さうし、不斷に生成し伸展して萬物を育くんである。古人はこの消息を端的に直覺して、『天行は健なり』と述べた。この言葉は簡であるが意味は深長である。誠に天の運行自然の推移は規則正しく少しも無理がない。吾人人類も亦こゝに鑑みて自己の行動に無理もなく自然の天則に従つてこの身とこの心の姿を、健にせねばならぬ。『天行は健なり、君子は自彊して息まず』とは、實にいゝ言葉ではないか。

○五 月

五月は清新で生き生きとしてゐる。落ちついたしづけさがある。しづかにこの風景に眺め入ると、自ら、あの若々しい緑の木の芽のやうに伸びくとする希望と光明が湧いてくる。潑刺とした若い木の芽が日毎に成長して茂つて行く。初夏のすがすがしさ。微風にそよぐ若葉のさゝやき何の苦悶もない少年のやうな新緑の姿。それは地の底から満ち充ちた生命を一ぱいに吸ひ上げて萌ね出た木の精だ。さんくくと輝く五月の朝の光りの中に、ありとある木々の若芽はわが生命を讚美してゐる。くつたくなかない少年の日を忘れた心の衰へた者よ、この輝く光りを浴びよ。人生の塵勞につかれてゐる憐な者よ、五月の爽な微風は清新な生命を吹き込んで、汝の汚れた胸を淨めてくれるだらう。五月よ、五月よ、さうだ、お前は私の久遠の女性だ。

○底 力

底に深く力を藏することが肝要である。深く自己の生命を掘り下げて行くことが難事である。一時に閃く星は瞬間に消ね失せる。永劫に光るものは容易に生れない、靈の試練を積んで内に力を蓄へるものゝみが永遠のものを創造する。

創始者は常に底の力を養つてゐる。目に見えない地下の營みをする。花が開くまでの樹木の苦惱を忘れてゐる者が凡人だ。今有名になつてゐる、西式の強健術を創始した西勝造氏には、二十年間の努力と苦心と持久があつた。二十年間の地下の營みのあつたことに留意しなくてはならぬ。何事もさうだ。一生の修業である。決して是れでいゝといふ時はない。斃れたところを墓とするの大覺悟をして見ない底の力を蓄へることが何より大事である。古今東西を問はず萬世に光りをのこしてゐる至人の業績にはみなかゝる煉獄、苦惱、鍛錬がある。古人の偉業を思ひ古人の辛苦を味うて自己の心を反省するとき、如何に自己が道に對して不忠實であるかを知る。猛省して、自己の腹の力を養はう。

○先 づ 試 み よ。

力は試みることから生れる。先づ試みなくてはならぬ。生活を怖れてゐる者には本當の生活はない、自己の力を隠し自己を謙遜にするはいゝ、しかし、卑屈と卑怯は非常な不徳である。どこまでも自分の力をためすがいゝ。ナポレオンのあの意氣を持ちたい。實行してゐるうちに、自己の力が解つてくる、自信も生じてくる。壘の上の水練では百年

經ても物にはならない。自ら水に身を投せよ。必らず岸に泳ぎつげる。水に身を投げるには勇氣がある。この決心と元氣を養つて、何事にも直面して自己の力をためせ。が、こゝに注意すべき一事がある。試みるとは單に試験するの意ではない。本當の歩みをする人生に、單なる試みはあり得ない。試みる時の心の態度持ち方は常に眞面目であり眞劍でありたい。

何事を試みるにも、生命を打ち込んで行はねばならぬ。この心構へを忘れてはならぬ。

『餓れた獅子は兎を捕へるにその全力を捧げる』といふ。こゝである。このいのちをさゝげるの眞劍さがなくてはその人の試みは死んでゐる。進歩も發展もない。自信も信念も生れない。常に生命を打ち込んで爲るとき、自己の眞の生命が輝いてくる。先づ試みよ。しかも全力を捧げて。

○芭蕉の言葉。

芭蕉の弟子北枝と翁の問答の言葉の中から、次の二ヶ條を示さう。

『見てよき書は何ならん』翁曰、『見てあしき書とてはなし儒佛より國書其外謠淨瑠璃本も見るとし。』

『他門と交りて苦しからずや。』『くるしからず、交りてあしきものは博奕とぬす人なるべし』

以上の二ヶ條によく芭蕉の人となりが見えてくる。芭蕉が包容力の大きいこと。又自己の生命に役立つものはすべてを汲みとつてわが養分としてゐること。根を深く長く喰ひ込ましてゐるとなごを思ふと、今更にこの翁を慕ふ心が深くなつてくるではないか。(昭和五年五月一日綠蔭の下にて)

FRAGMENTO

ひろし

眞に愛するとき我々は愛する者の存在に驚異を感じる。

われわれが病苦、貧窮、羞恥、悲哀、絶望……など、われ／＼にとつて不幸とよばれる反價値的な状況に置かるゝとき、そこにかへつて自己の存在が、又人生の、自然の、否總じてあらゆる存在の存在性が明かとなり鋭くなり、なま／＼しく感ぜられるのは何故であるか。

存在の存在性はそれが危機にひんし、不安に曝さるゝとき明るみに出されるのである。

調和にあるとき、平安に置かるゝとき、一般にそれについて心づかひを要せぬとき、存在性はあまりの自明性の故に問題となることがない。

存在の意識は存在の危機である。

逆の方向にすゝんで行かう。

至高、至美、至善……かくの如き十全性へ近づくとき、その充實性の故に自体の豊けさの故に、絶大なる調和性、安定性の故にそれらはもはや存在の危機におびやかさるるにはあまりにもそこから遠いのである。

かくの如き至境に於ては存在は總じて問題となることができない。存在性をそれについて問ふことは絶対に不可能となる。

思想史上、神の存在を問ひ、その存在を證明せんとする試みはすべて不成功に了つてゐる。その存在を問ひ

うる如き神は未だ神ではないのである。誰であるか？
神に向つて鼎の輕重を問はんとするは！

愛する者を失ふことを恐るゝときわれは苦しいまでにその愛する者の存在に關心せざるを得ないのである。

愛兒の重き病ひにあるときの親は、そのとき程その子の存在を痛切に感ずることはあるまい。

將に喪失せんとする危機に際してそのものゝ存在性が明白々となる。

戀する者はその失戀の可能性の故に、その不安の故に彼女の或ひは彼の存在に對して鋭敏なる感受力をもつ。

われ、たゞ一人を愛す。おんみ唯一人を！ かけがへなき唯一人！ かくの如き思ひの内に於て對者の存在性は秋霜のはげしさ、酷しさを以て迫り來るのである。

女から女へのだらしなき放浪をついけんとするところの無限に多くの代償を肯んするところのドンファンにあつては、かくの如く愛する者の存在の存在の意識に到達することは永久に許されない。

人形を失へる少女は代りの人形を與へられて云ふ。

『この人形ではない。こんな人形ではいけない。元のでなくては！』

眞に愛するとき人形さへもかけがへなき唯一の存在なのである。

しかるに、おどろくべき逆説 (Paradoxo)！

愛の高揚、純化の極北は再び愛する者の存在を無力にする。もはや得ざることを恐れず、もはや失ふことを恐るゝ

必要はない。

死とは何であるか？

死とは存在の (少くも現世的なる存在の) 喪失である。

人間は可死的である。汝自身がさうである如く、汝の敬愛する父母も、兄弟姉妹も、親しき友人も善き隣人も、そして又汝の愛するものも！ 古人はこれはかなき人間の存在の仕方を水の泡に喩へ又露の身と呼んだ。しかし、それは存在を夢幻の輕さに浮動せしむることであつたらうか？

否！ 私はさうは考へない。その存在のはかなきこそは却つて存在を重くするものである。可死的であることは人格價値の深みに通ずる唯一の道なのであるまいか？

我々は恒常的なるもの、破滅から完全に遠きもの——例へば堅き石の一つを思へ——そのやうなものを人間的に愛することはできない。總じて過ぎ去るもの、亡びるもの、

みが我々に愛することを許されてゐるのである。

我々は何故に父母を愛しなくてはならぬか？ 我等は何故に若き日を惜しんで研究に仕事に精勵しなくてはならぬか？

父母は、かけがへなき我々の父母は可死的なのである。そして、若き黄金の日がいつまでもつゞくであらうとは誰が考へ得るか？

誤解すべからず。返らぬ若き日を放逸に遊び過さうとする輕薄なる刹那的享樂主義は存在を空虚にする。そのやうな若き日は價値に於て、輕さに於て、一片の紙屑よりも空しい存在なのである。

(五月十二日)

編輯人 小和田 博 非